Chapter 16 : **画面の影たち Part 3**

フレアオンの部屋の明かりが不吉に点滅した。

彼のゲーム機がバグった。

画面には一つのポップアップが表示された。

| 「エーフィがパーティーを離脱しました。」

「ママ…？」と彼は囁いた。

階下で、彼はリビングに飛び込んだ。  
ブラッキーは爪を研ぎながらオランコーヒーをすすっていた。

「パパ、ママがいなくなった！あの怪しい本部に行って、ログインし直してないんだ！」

ブラッキーは一瞬瞬きをし、うめき声をあげ、カップを部屋の向こうに投げた。

「…クソ、またかよ。」

一時間以内に…

救出チームは６匹のイーブイ進化たちで結成された。

* フレアオン、怪しいものは燃やす準備万端。
* シャワーズ、刺激したら危険（特にトイレの近くでは）。
* 彼女の両親：リーフィアとグレイシア、まだ疑い深いが誇らしげ。
* 教師のニンフィア、兼スパイと感情サポート。
* ブラッキー、怒っているが戦術核のように冷静。

彼らに気づかれぬよう、アブソルは影から尾行していた。  
彼はあの本部に潜むものを知っている。

彼らはダークスピン・スタジオに潜入した。

壁には点滅する広告とネオンバナーが並ぶ。

| 「ピカチュウの帽子、5％チャンスで99.99ドル！」  
| 「今日クジラになれ、明日勝て！」

彼らはねじれたサーバーホールを慎重に進んだ。

突然、いたずら合戦に負けて雑用係に降格したヤミカラスがモップを持って飛び出した。

「わー！やられたな、ガキども！」

だが、誰も反応する前に、

バンッ！

アブソルがヤミカラスを掃除カートに押し倒した。

「そのモップで掃除しろ、クサいゴブリン。」

彼らはCEO室に到達した。

ゲンガーがキラキラ光る台座の上に立ち、ネオンライトが背後で輝く。  
エーフィは高級なルートボックスリボンで縛られ、彼の背中にまるで邪悪な配信セットのように括り付けられていた。

「友情と家族の価値観で俺を止められると思っているのか？」とゲンガーは嘲笑った。  
「俺がマーケットを支配しているんだ！」

彼が指を鳴らすと、真っ暗闇になった。

だが、彼は侮っていた…

割引バーベキューの焚き火のように燃え上がるフレアオン。

内蔵の父親モード夜間視力を冷静に発動したブラッキー。

父と息子は一瞬も止まらなかった。

ダブルノックバック。  
燃えるチャージひとつ。影のタックルひとつ。

ゲンガーは倒れた。

エーフィは解放された。

外ではサイレンが鳴り響く。

ルカリオ警官とガーディア捜査官がバッジを光らせて駆けつけた。

その後ろには、まるでクールエイドマンのように壁を突き破って入ってきたマッシブなカイリキー将軍がいた。

「お前は心理操作、ルートボックス詐欺、そして司書誘拐の罪で逮捕だ」とルカリオは唸った。

ゲンガーは影に紛れようとしたが、モップバケツにつまずき、カイリキーの四連スープレックスを喰らった。

**エピローグ：**

ゲンガーの会社は閉鎖された。  
ゲームはサービス終了となり、  
全ての返金が処理された。  
アブソルは涙のカタルシスを流し、  
ヤミカラスはワリオウェアに雇われた。  
エーフィは夫にキスをし、フレアオンをレイドの準備にゲーム時間を使ったことで少しだけ叱った。

そして7匹のイーブイたちとアブソルは勝利の帰路についた。